

原著

## 『ナイフの発音の仕方』における主人公のラオス人としての思い

加藤 良浩<sup>1)</sup>An Analysis of a Protagonist's Desire as a Laotian in *How to Pronounce Knife*

Yoshihiro Kato

## 要約

*How to Pronounce Knife* is a collection of 14 short stories by Souvankham Thammavongsa. The text contains common motifs that speak to the experiences of immigrants from Laos, such as yearning for a sense of home and feelings of alienation. The stories “Randy Travis” and “Mani Pedi” strongly depict a nostalgia for home. In the titular story “How to Pronounce Knife,” the protagonist Joy, whose parents are Laotian refugees, refuses to admit that the “k” in “knife” is silent as per the grammatical rule of Lao. This persistence reflects her pride in the culture of Laos, symbolized by Lao, and the richness of the culture inherited by her ancestors, even when she has run the risk of sacrificing a sense of belonging to the society in which she lives now.

Keywords : Laos, Lao, Sense of home, Alienation

## はじめに

スーヴァンカム・タンマウォンサ (Souvankham Thammavongsa, 1978 ~) はラオス難民を両親に持つカナダの詩人、小説家である。タイの難民キャンプで生まれた彼女は、生後1歳で両親とともにカナダのトロントに移住しその地で育つことになった<sup>1)</sup>。トロント大学在学中より詩作品を発表し、2004年には最初の詩集『ささやかな主張』(*Small Arguments*) でカナダの文芸作品に与えられるレリット賞 (Relit Award)、2014年には三冊目の詩集『光』(*Light*) でオンタリオ在住作家のためのトリリアム・ブック賞 (Trillium Book Award) を受賞し

ている。一方で短編小説も書き、2019年短編「ぱちんこ」(“Slingshot”) でオー・ヘンリー賞 (O. Henry Award)、2020年には最初の短編集『ナイフの発音の仕方』(*How to Pronounce knife*) で、カナダで出版された小説作品を対象としたギラー賞 (Giller Prize)、2021年には同作品にてトリリアム・ブック賞を獲得している。

小説家であると同時に詩人でもある彼女は、小説の表現方法においてもきわめて簡潔でシンボリックな言葉を用いていると言えよう。実際彼女自身、「簡潔な言葉が持つ作用について大切なことは、それが極めて多孔性がある、つまり読者にその言葉の解釈をゆだねる余地を残すということです」(The

1) 加藤 良浩 東京未来大学こども心理学部非常勤講師 (Tokyo Future University) xxholiday@gmail.com

thing about simple language is that it can be very porous. It leaves so much room for the reader to do the work.) (Channing, 2020) と述べているが、この発言からは、簡潔な言葉が意味の多様性をもたらすことに着目し、意図してそうした言葉を用いていることがうかがえる。

短編集『ナイフの発音の仕方』は、作者の直接的な自伝ではないものの、ラオス難民について彼女が見たり聞いたりしたことにもとづいて書かれた14の短編で構成されている。これらの作品は物語の内容や登場人物もそれぞれ異なっているとはいえ、どれもラオスへの郷愁の念、および異国の地で暮らす疎外感や風習、文化の違いにもとづく違和感という、ラオス難民が抱える悩みや問題を共通のテーマとしている。

本論では、ラオスへの望郷の念が特徴的に表現されている二つの短編、「ランディ・トラヴィス」(“Randy Travis”)と「マニ・ペディ」(“Mani Pedi”)を取りあげた後、表題作の「ナイフの発音の仕方」(“How to Pronounce knife”)について検討し、その中で、ラオス難民の子どもとして生まれた主人公がどのような思いを抱きながら生き、生きようとしているのかについて考察することにした。

## 1

短編「ランディ・トラヴィス」では、ラオス難民の家族の母親がカントリー歌手のランディ・トラヴィスの笑い声と歌に魅了され、一日中ラジオで彼の歌を聞く様子が描かれている。彼の笑い声に魅かれたのは、それが「どこか優しく気持ちを和ませてくれる、自分たちだけに聞こえる声」(43)<sup>2</sup>であるばかりか、「彼自身も孤独な気持ちを心のどこかで抱いている声」に聞こえたからである。彼女がとりわけ好んだ音楽は、彼の歌うアメリカのカントリーソングであった。彼女は、家庭の中で自分たちが話す話題を思い起こさせるその曲に共感し、「親しみを覚えた」(44)のである。

作者は、「カントリーソングには、故郷を離れて感

じる違和感や、望郷の念が語られています。その感情は誰にも理解できるものですが、とりわけ移民には共感できる気持ちなのです」(Channing, 2020)と述べている。「ランディ・トラヴィス」に登場するラオス難民の一家の母親がランディ・トラヴィスの歌うカントリーソングに心酔したのも、優しいながらも孤独な印象を与える彼に自分の姿を重ねたからであろう。加えて、作者が言うように、移民としての彼女が、故郷を離れてある違和感を覚え、望郷の念にかられたからにちがいない。

こうして彼女はランディ・トラヴィスに魅了され続けたのだが、数年するとなぜか興味の対象はスロット・マシンへと移っていく。そのマシンの前に密着するかのようになりながら、彼女は賭けた硬貨を失うと同時に希望も失っていくように見えた。やがて彼女は家に帰らないようになる。そしてついある日、行きつけのカジノの駐車場に停めた車の中で亡くなっていることが発見される。

このような結末に至ったのは、故郷ラオスを離れ、孤独と望郷の念にかられた彼女が、ランディ・トラヴィスに自分の姿を重ねることで慰めを見出そうとしたが果たせず、その慰め自体が幻想にすぎないと気づいたからであろう。

実際、ランディ・トラヴィスへの彼女の熱狂ぶりが異常であることに家族も当初から気がついてきた。彼女の夫は、「有名人の彼はわれわれとはあくまで無関係な人間だよ」(49)と忠告した際、それが耳に入らない様子を見た語り手である彼女の娘は、「ランディ・トラヴィスへの思いは母を覆っていた影のようなものであり、それを取り去るには何らかの光が通り過ぎるのを待つしかなかった」と述べている。そして、彼女を覆っていた幻影とも言うべきその「影」が消えたとき、彼女の希望が失望へさらには絶望へと変わっていったと考えられる。

「マニ・ペディ」では、ラオス難民のレイモンドと彼の姉の物語を介して、故郷ラオスへの二人が抱く郷愁の念が示唆されている。レイモンドは元ボクサーであり、現役を退いた後仕事を転々としている

うちに、姉から彼女の経営する格安で評判のネイルショップで働くように言われる。ボクサーであった彼は、ネイルショップで働くことに抵抗を感じなかったわけではない。しかし、戦争によって爆撃されたラオスから竹で作った粗末ないかだで姉とともに命からがら逃げ出して以来姉を頼りとしてきた彼にとって、彼女の命令は絶対であった。

試行錯誤のうちにもレイモンドはネイルショップでの仕事を覚えていく。しかしその仕事は、自分の健康を犠牲にすることで成り立つことであることを彼は理解する。

彼にとって仕事での唯一の楽しみは、彼に礼儀正しく接してくれるミス・エミリー (Miss Emily) に応対することであった。だが結局、彼女は裕福な男性と交際していることがわかる。彼の心の内を見透かしたように姉は、「あなたがつき合う相手はこのお店にいるような女の子よ。あの子たちはみなあなたに夢中よ」(70) と彼に向かって言う。しかし、レイモンドにわかっていたことは、店の従業員の女性たちは結婚しているか結婚を前提に交際しており、姉の前でこそ言いはしないものの、彼女たちは仕事への不安や不満を抱いているということであった。彼らは、「店で扱う薬品が原因で子供がどうしてもできない」(70)、「咳が出てどうしても止まらない」、「この仕事をやめたいけれども、他にいくところがないからやめられない」と言っていた。彼女たちも経済的な安定と引き換えに、健康を犠牲にし、生活上の妥協の下に仕事をしていたのである。

たしかに、「大きな夢を持ってはだめ、夢は小さく持ちなさい」(68) とレイモンドに告げ、また「希望ということは彼女にとっては恐ろしいものであった」(71) と述べられているように、彼の姉はいたずらに夢を追わず、確実に現実的な目標だけを追い続け生活してきたことで、経済的に一定の成功を収めてきた。もっとも、化粧の下に隠れた彼女の顔は、「レイモンドと同様打ちひしがれ疲れたように見える」(70) ことから見て、経済的な安定を求めらる中で彼女もまた自らの健康を犠牲にして生活してきたことは疑い

ない。しかも、その経済的な安定と引き換えに失ったものは彼らの健康だけではない。

仕事の帰り、夕暮れが迫る中、車を空き地に止めたレイモンドと姉には、近くの家の裏庭で家族そろってバーベキューをしている音と、「くすくすという、子供たちの無邪気な笑い声」(71) が聞こえてくる。

そのくすくすという笑い声は、彼ら二人が子どもの頃発したような笑い声であり、今では彼らにとっては発することが愚かにも感じられるものであった。それは遥か遠くのものであり、自分たち以外の人々によって発せられるものとなっていた。彼らができることといえば、姿を隠したまま、その笑い声に近づくことだけであった。

It was the kind of giggling they themselves as kids. Now, that kind of giggle seemed foolish for them to do. It was like a far distant thing, a thing that happened only to other people. All they could do now was be close to it, and remain out of sight. (下線引用者) (71)

彼ら二人は、生きていく上での経済的な安定と引き換えに、今や「無邪気な笑い声」を発する機会を失ってしまった。しかしそれでも彼らはかつて発していたその声そのものを否定しているわけではない。それを「発することが愚かに感じられる」のは、経済的に安定した現在の生活を保持しようとするに彼らの意識の大半が向けられている結果、その安定を手放そうとする試みが愚かにすら感じられるからであろう。

とはいえ、彼らが「姿を隠したまま」密かに「その笑い声に近づく」ことだけでも望んでいるとの描写からは、現実の安定した生活との折り合いをつけることができるかぎりにおいて、「その笑い声」をせめて部分的にでも回復したいと切望する彼らの心情がうかがえる。このように、二人が子供の頃発した

笑い声を少しでも回復したいと思うのは、その声が故郷ラオスの地と分かちがたく結びついているからである。たしかに今や彼らは、心身の健康を犠牲にしながらも、経済的な安定を得ている。しかしその一方で、経済的な安定を捨てても、無邪気な屈託のない笑いを発することができたラオスで過ごした日々に戻りたいと思う気持ちを決して捨て去ることはできないのである。

## 2

短編「ナイフの発音の仕方」(“How to Pronounce Knife”)では、ラオス難民を両親に持つ小学校1年生の少女ジョイ(Joy)の視点を介して、移民として異国の地で暮らす疎外感や孤独感、およびラオスへの郷愁の念が描かれているが、この作品において、彼女は短編作家としての持ち味を遺憾なく発揮していると言えるだろう。

ジョイは、ナイフ(knife)という言葉が学校で正しく発音することを最後まで拒み続ける。けれども結局、担任のチェ先生(Miss Choi)の理解を得て他の正しく朗読した子供たちと同様、最後に褒美をもらう。この最後の結末は何を意味するのだろうか。

ジョイは父親と母親と一緒に二間の小さなアパートに暮らしているが、彼らの暮らしぶりはいたって貧しい。食事の際には、食卓の代わりに四角に広げた新聞紙の上に料理を載せ、家族3人がその周りに座って食べている。その料理といえば、肉屋が捨ててもおかしくないと思うような特売品の豚の腸肉にキャベツを入れ、ショウガや香辛料などで強く味付けしたものである。

ある日ジョイは、タイプで印字された学校からの通知を母親に手渡すが、英語が読めない母親はいつものようにそれをゴミ箱に捨てる。けれども手紙の内容が少し気にかかったジョイは、ゴミ箱に捨ててあった通知を取り出し「家族の中で唯一、字の読み方を知っている」(7)父親に見てもらおうとする。しかし、仕事で疲れ切っていた彼は、その紙を手で振り払いながら「後で」(“Later”)(4)とラオス語

で彼女に言う。彼はその通知をついに見ることはなかったのだが、そのとき彼は、「まるで何か大切なことを思い出したかのよう」に、「ラオス語を話してはだめだよ。それにラオスの出身だと誰にも言っちゃだめだ」と付け加える。しかし、ジョイはそう言う父親のTシャツの胸の部分に、「横に4文字でラオス(LAOS)と書かれてある」(5)ことを認める。

難民として働く彼は、ラオスの出身であるという理由だけで差別されることを周囲から聞いているだけではなく、自らも経験しているのであろう。実際彼は、ジョイたちに自分の給料が安いことへの不満をもらし、また「ラオスで高い教育を受けかなりいい仕事に就いていた人間でも、今ではミミズを掴まえたり、にきび面の10代の若者に使われたりしている」(4)と嘆いている<sup>3</sup>。そのような不当な扱いを受けることを避けるため、娘のジョイにはラオス出身であることを隠すことを助言する。しかしその一方で、自らはラオス人であることに誇りを抱いているかのように堂々とラオスという文字が入ったTシャツを着ている。この部分の描写には、生活の必要上ラオス難民であることを隠さなければならないという気持ちと、それでもなおラオス人であるという誇りを捨てたくはないという彼の矛盾した気持ちが表現されていると言える。

その数日後は写真撮影であった。学校からの通知はその連絡であり、結局ジョイと両親はそれを知ることはなかったのである。もっとも、その日両親に心配をかけまいとして述べたと思える彼女への彼女の嘘の発言から見て、彼女は写真撮影にふさわしい特別な服を持ってはいなかったにちがいない。みなよそ行きの服装をする中で、ジョイだけは例外だった。ジョイの服装は普段と同じ濃い緑色の上下のジャージで、足の両膝の部分だけ擦れて色が薄くなっていた。靴は汚れていて、その汚れを隠すために写真の撮影者は工夫をしなければならなかったほどである。こうして学校からの連絡が理解されなかったこともあり、ジョイの家庭の貧しさが写真撮影の中でひときわ印象づけられる結果になったわけである。

ジョイは、学校から朗読練習のために与えられた本を持ち帰ったある日、その中に“knife”と書かれた言葉を見つける。彼女はその語を発音しようと試みるも、正しい読み方がわからなかったため父親に尋ねる。それを見た彼は、「カ、ン、アイ、フ。これはカナイフだ」(“Kah-nnn-eye-ffff. It's kahneyff.”) (7) と“k”の文字を発音した読み方を彼女に示す。

インタビューの中で、作者自身は次のように語っている。

私の家ではラオス語で話していました。私は学校では英語で話していましたが、両親とはまず英語で話すことはありませんでした。ラオス語は発音と深く結びついているため、私の両親も多くの読み違いをしていました。学校で“knife”は、みな“k”を発音しないで読んでいると私が言うと、彼らは笑って、なんてばかげたことだ、せっかく文字が書いてあるのにそれでは何の意味もないではないか、と言っていました。(Channing, 2020)

この発言は、ジョイの父が“k”を黙字として読もうとしなかったことと符合している。

翌日チェ先生は、まだ朗読をしていないジョイを指名する。ジョイは順調に朗読を続けていくが、“knife”という単語の“k”を黙字として読まずに発音したため、先生がそこで朗読を止め正しく発音するように促す。数度の促しにもかかわらず“knife”を正しく読めないことを理解したクラスの他の生徒が、呆れた様子で“knife”の“k”は発音しないことを彼女に指摘したほどである。先生からも“knife”の“k”は黙字であることを教えられ、あげく校長室に呼ばれ読み方の指導を受ける。だが、彼女は父親が言ったように、「言葉の最初の文字は発音するはずだ」(9)との主張を断固として変えようとはしない。そのとき彼女は、「まるで人々が彼女からある大切なものを奪おうとしているかのように叫び」ながら、あくまで“k”が黙字であることを拒否する。それは彼女自身がラ

オス語ひいてはラオスの文化を大切なものと見なし、その価値観を決して手放したくない、つまり、ラオス人としての矜持を捨てたくないと思っているからだと考えられる。

短編「世の中は何と残酷なことよ」(“The Universe Would Be So Cruel”)の中では、町で唯一結婚式の招待状をラオス語で印刷しているヴォン氏(Mr. Von)が、あるラオス人のカップルがすべて英語で書かれた結婚式の招待状を出したのを見て、「言葉は人間の心の故郷だ。なぜ、ラオス語を使わないんだ」(It's where you come from. Why leave it out?) (90)と述べているが、“k”の文字を読もうとするジョイもまた、彼と同様にラオス語を「心の故郷」と見なしているのにちがいない<sup>4</sup>。

“k”が黙字であることを拒否する彼女の一連の出来事には、「家族への忠誠と引き換えに彼女が属する社会への所属性を犠牲にした様相が描かれている」(the child sacrifices belonging for loyalty.) (Palleson, 2020)との見方がなされている。たしかに、校長室に呼ばれてもなお自分の主張を曲げなかった彼女は、朗読後にもらえるはずだったヨーヨーをチェ先生からもらうことができなかった。この出来事が示すように、彼女が暮らす英語圏社会の規則に従わなかったためその社会の一員として受容されることを拒まれたのであり、この意味では、そのとき彼女は、社会への所属性を犠牲にしたとすることができる。しかし、それでもなお、放課後チェ先生がジョイに対して、自分の好きなものを袋の中から選ぶように提案した事実は、その所属の拒否をも凌駕する力を先生が彼女の中に感じたことを示しているのではないか。つまり最後まで最初の文字の“k”を発音しようとするジョイの行為の中に何か大切な信念が潜んでいるとチェ先生は感じ、その意思を彼女が尊重しなくてはならないという気持ちになったことを示しているのではないか。このように見た場合、ジョイの行為は一時的には、彼女が暮らす社会の一員として許容されることの拒否という事態を招いたものの、ついにはその拒否を越える結果をもたらしたと考えら

れる。

その晩、ジョイは夕食を食べている父の姿を目にする。箸で米を一粒もこぼさないように気づかって食べている父のつつましい姿が、彼女には「とても小さく、縮んでいるように見える」(8)。このように見えたのは、字の読み方を知っているはずの父もまた、正しい読み方を知らない場合があるのだということに彼女が気づいたからであろう。そしてその現実認識を「縮んでいるように見える」という比喻で表現したものだと言える。この後、「父はほかにどんなことを知らないのだろう。自分はほかにどんなことを学んでいかなければならないのだろう」(9)と彼女は思う。家族の中で知識の点で最も頼りにすべき父でさえも、彼にとっての異国の地では知らないことがあるため、手探りながらも、独力で学んでいかなければならない。つまり、父に対する信頼はなおも保ちながらも、将来必ずや自分だけの力で学んでいかなければならないという、不安ながらも覚悟に似た自身の気持ちを表しているように思われる。

ジョイは、チェ先生から朗読をした褒美として青い空に浮かぶ飛行機のパズルをもらう。それは「ある意味では、父も得た賞であった」(9)。チェ先生は、自分の主張をあくまで貫くジョイの一途な姿勢に理解を示し彼女に賞を与えたが、その主張のもととなったのは彼の教えだったからである。

彼らはそのパズルの小さなピースすべてを賞としてもらった。青い空にあたるパズルの端から埋めていき、次に中央部に他のピースを埋める。最後に残りのピースを埋め、全体を一つの絵として完成させるつもりである。(9)

They take the prize, all the little pieces of it, and start forming the edge, the blue sky, the other pieces, the middle. The whole picture, they fill those in later.

もちろん彼女は朗読を機に、ちょうど「LAOS」と書かれたTシャツを着ながらも「ラオス語を話して

はだめだよ」と言う彼女の父が示す姿勢に似て、価値観の相反する姿勢を保持していく必要性を感じ始めたにちがいない。すなわち、ラオスの文化を心の中で保ちながらも、それとは異質で価値体系の異なる文化を受容していくという、一種矛盾した姿勢を抱いていく必要性を感じ始めたと考えられる。もちろんそうした姿勢を持つことは、所属する社会からの受容の拒否という現実の壁に直面せざるをえないことはたしかである。しかし、その壁にぶつかりながらも、このとき彼女はそれを乗り越え、家族にとっての「心の故郷」と言うべきラオス語、ひいてはラオスの文化を最後まで自分の意志の力で保持することができたのである。

彼女がパズルを埋めようとする描写にさわやかな趣を感じるのは、たとえ物質的に貧しい生活の中でも、ラオスの言葉に象徴されるラオスの文化という価値を守ろうとする彼女の姿勢が投影された結果であろう。つまり、自分たちが受け継いできた、大切に豊かな価値を誇り高く保持していこうとする彼女のひたむきで純粋な姿勢が青い空という描写に投影され、その投影が、パズルを埋めようとする描写自体にすがすがしい印象を与える要因として作用した結果であるからにちがいない。

### 3

これまで見たように、「ランディ・トラヴィス」と「マニ・ペディ」では故国ラオスへの望郷の念がテーマとして語られていた。対して「ナイフの発音の仕方」では、“knife”の“k”の文字をあくまで発音しようとする主人公の行動を通して、ラオスの文化への尊重がテーマとして主張されていた。それぞれテーマとする感情の位相は異なるものの、ラオスに対する主人公の強い愛着が示唆されている点では共通している。

先の二つの作品においては、幻想からの絶望や経済的安定に対する犠牲を回避しようとする気持ちが、望郷の念に付随する主人公の願いの実現化を妨げていた。対照的に「ナイフの発音の仕方」では、

目先の利益を犠牲にしてもラオスの文化を尊重しようとする主人公ジョイのひたむきな姿勢が、彼女の願望の現実化をもたらしたと言える。

クラスの中でも目立って経済的に貧しい状況の中で暮らしているながらも、彼女はもらえるはずの褒美を犠牲にしても信念を貫こうとした。彼女は現在所属する社会からの同化圧力にも屈せずその信念を貫き通すことで、その社会からの受容の拒否を乗り越え、願いを実現することができたのである。

もちろん、今後学んでいかなければならないことに対する彼女の不安のつぶやきが示しているように、ラオス文化への信念を貫こうとし続けた場合、所属する社会の文化と自分が守ろうとするラオスの文化という二つの文化を受容していくすべを学んでいく必要があり、その場合、価値体系の相違がもとで引き起こされる現在生きている社会からの拒否は避けられないであろう。

しかし、ジョイがその拒否をも克服していく可能性を所持していることは、やはり彼女がチェ先生からもらった青い空に浮かぶ飛行機のパズルに示唆されているように思われる。その青い空は彼女のひたむきで純粋な信念を映し出していることに加えて、そこに浮かぶ飛行機そのものが、信念に支えられ前に進んでいく彼女の姿を暗示していると受け止めることができるからである。

## 注

- 1 カナダは米軍によって非道な攻撃が行われたベトナム戦争に関与したが、この移民の背景には、その汚名を払拭し人道に配慮した国家であるとのイメージの向上を企てた、「カナダ政府インドシナ難民受け入れ特別事業1979-1980」があると言われている。 Troeung, Y-Dang. (2021) . pp.6-14.
- 2 テキストはThammavongsa, Souvankham. *How to Pronounce Knife*. Bloomsbury: Bloomsbury Publishing,

2021.を使用。訳は拙訳。以下括弧内にページ数を示す。

- 3 作者の家族がタイに難民として逃れた時期は、1976年以來起こったラオス人民民主共和国に対する反政府ゲリラ活動の初期であるが、「この時期に逃げ出したのは、企業家、医者、技術者などの高等教育を受けた経済的に余裕のある人々だった」（青山利勝（1995）.『ラオス』中公新書、139頁）ことから見て、ジョイの父親の周囲の難民たちの多くは、ラオスで高い教育を受け比較的裕福な暮らしをしていた人たちであると推定される。
- 4 タンマウォンサは、白人の読者が発音しやすくするため英語的な名前に変更してほしいとの出版社からの要請を拒否している。このことから、彼女自身も、ラオス語に強くこだわる姿勢を抱えていることがうかがえる。 Troeung, Y-Dang. (2020) pp.140-142.

## References

- Channing, Cornelia. (2020, April 23) . Laughter as a Shield: An Interview with Souvankham Thammavongsa; *The Paris review*  
<https://www.theparisreview.org/blog/2020/04/23/laughter-as-a-shield-an-interview-with-souvankham-thammavongsa>
- Palleson, Leslie. (2020, August 27) . Souvankham Thammavongsa. *Prism International; CONTEMPORARY WRITING FROM CANADA AND THE WORLD*.  
<https://prismmagazine.ca/2020/08/27/we-were-different-people-and-we-understood-that-then-a-review-of-souvankham-thammavongsas-how-to-pronounce-knife/>
- Thammavongsa, Souvankham (2021) . *How to Pronounce Knife*. Bloomsbury: Bloomsbury Publishing
- Troeung, Y-Dang. (2020) . On Names and Resonances. *Canadian Literature; Vancouver 242*. 140-142.
- Troeung, Y-Dang. (2021) . On Refugee Worldmaking.” *Canadian Literature; Vancouver 246*. 6-14.
- 青山利勝（1995）.『ラオス』中公新書、139頁
- (かとう よしひろ)

【受理日 2022年12月7日】